ISSN 0289－4130

研究紀要

第28号

加曽利Ｂ１式の横帯文系紐線文土器について　大屋　道則　上野真由美

西関東における高井東式土器の研究　古谷　渉

磨製石斧の材料と加熱処理　大屋　道則

埼玉県内の北陸系弥生土器－池上・小敷田遺跡を中心に－　魚水　環

大木戸遺跡の方形周溝墓　福田　聖

水晶製勾玉の製作とその工程　上野真由美　大屋　道則

川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（２）　福田　聖　赤熊　浩一　岡本　千里　澤口　美穂　大屋　道則

古墳時代後・終末期における一墳丘複数埋葬古墳について（１）　青木　弘

古代瓦葺き寺院の衰退－国分寺創建後の寺院像を瓦から考える－　昼間　孝志

2014

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1　高井東式　羽状沈線（在地）表

2　高井東式　羽状沈線（在地）裏

3　高井東式　波状縁隆帯文（在地）表

4　高井東式　波状縁隆帯文（在地）裏

5　高井東式　波状縁隆帯文（搬入品）表

6　高井東式　波状縁隆帯文（搬入品）裏

7　安行1式　帯縄文系（搬入品）表

7　安行1式　帯縄文系（搬入品）裏

上段：前原遺跡出土遺物
下段左：前原遺跡勾玉未製品集中一面　右：同二面

上段：反町遺跡出土遺物　中段左：反町遺跡 SJ48 勾玉未製品集中　同右：同 SJ48 遺物出土状況　　巻頭図版 3
下段：　1：剥離痕　2：敲打痕　3：敲打研磨痕　4：同（腹部）　5：同（面取り）　6：穿孔痕

目　次

巻頭図版

序

加曽利Ｂ１式の横帯文系紐線文土器について …… 大屋道則　上野真由美　（1）

西関東における高井東式土器の研究 …… 古谷　渉　(29)

磨製石斧の材料と加熱処理 …… 大屋道則　(45)

埼玉県内の北陸系弥生土器ー池上・小敷田遺跡を中心にー …… 魚水　環　(49)

大木戸遺跡の方形周溝墓 …… 福田　聖　(61)

水晶製勾玉の製作とその工程 …… 上野真由美　大屋道則　(73)

川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（２）
…… 福田　聖　赤熊浩一　岡本千里　澤口美穂　大屋道則　(95)

古墳時代後・終末期における一墳丘複数埋葬古墳について（１）…… 青木　弘 (115)

古代瓦葺き寺院の衰退ー国分寺創建後の寺院像を瓦から考えるー …… 昼間孝志 (131)

古代瓦葺き寺院の衰退

—国分寺創建後の寺院像を瓦から考える—

昼間孝志

要旨　国分寺の造営は律令国家が取り組んだ一大事業であったが、この国家的プロジェクトを契機に地方では瓦葺き寺院の衰退が始まることとなった。上野国と武蔵北部では、8世紀後半から10世紀にかけて上野国分寺の創建瓦を祖型とする無絞りの縦置き型一本造りの軒丸瓦が展開した。この「上野国分寺系」軒丸瓦は、国分寺のみならず、既存の寺院や新造寺院の軒も飾った。上野国では、平安時代には西毛の丘陵部を中心に寺院が次々と造られ、武蔵北部でも「上野国分寺系」軒丸瓦を用いた寺院が造られた。しかし、各寺院跡などから出土する軒丸瓦は少なく、反対に范の種類が多いという現象がみられた。また、主に上野国分寺修造期の瓦生産を担った藤岡・吉井窯跡群では、補修瓦として既存の寺院への供給も行い、広く汎用した。更に、その製作技法は武蔵北部の石原山窯跡にも齎され、周辺寺院への供給を行った。一方、平安時代に入って弘仁の大地震などの自然災害が多発し、寺院等にも大きな被害が生じたものと考えられる。多くの范種が生み出された要因はその修復に際し、非常時のためにストックされていた軒丸瓦と、不足分を各所の窯に分担させて少量生産した軒丸瓦で対応したためと考えられ、結果として瓦葺き寺院の衰退を促すことになったと推測した。

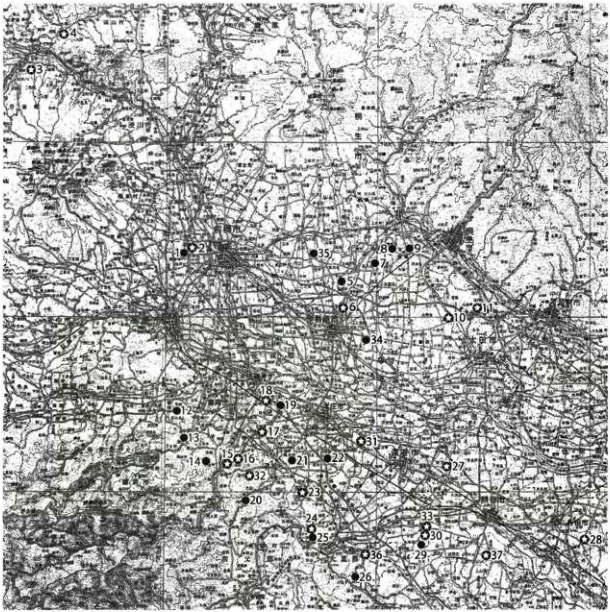
はじめに

瓦葺き寺院の始まりは、6世紀末に創建された大和飛鳥寺が最初である。その後、七堂伽藍を備えた本格的な寺院の造営は宮家や有力氏族間を中心に展開され、中央集権国家の戦略と相俟って急速に全国的に広がった。

天平13年（741）聖武天皇によって国ごとに国分寺造営の詔が発せられた。これまで天皇が発願し、造営された官寺は幾つもあったが、国を挙げて造営を命じる詔が発せられたのは初である。また、総国分寺といえる東大寺の造営が始まるきっかけは、詔を一年遡る天平12年（740）に聖武天皇が河内国智識寺に行幸した際、知識によって建立された盧舎那仏を拝したことによるとされる。しかし、同年に藤原広嗣の乱が起こり、結果として国分寺造営の詔も翌年に持ち越された形となった。

国分寺の造営主旨は、天然痘をはじめとする疫病や飢饉、社会に対する不満等を神仏の加護で鎮め、国の繁栄を護ろうとするものであった。しかし、地方では国分寺の造営が遅々として進まなかったようである。既に諸国には、国分寺以前に建立された有力氏族の寺院や官衙に付属した寺院が存在し、郡司等が直接支配していた。国の長官である国司は、都から離れずに国を統治していたため、国分寺造営の指揮命令系統は十分に機能を果たせていなかったものと考えられる。更に国分寺造営を困難にさせたものは、壮大な寺院の建物群である。特に建物の屋根に葺く瓦は、僧寺では恐らく十万枚を超え、尼寺と合わせればさらに多くの瓦が必要になってくる。これまでの寺造り、瓦造りとは規模や体制の面で大きく異なっていた筈である。

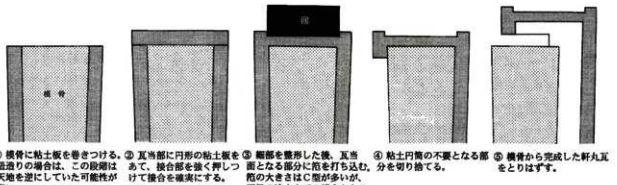
天平19年（747）、国分寺造営の遅滞に業を煮やした律令政府は、国司頼みであったこの国家事業に郡司層の協力を促し、堂塔の早期完成と僧寺・尼寺の開墾等を命じた。果たして国分寺の多くは、



1 上野国分寺
2 山王廃寺
3 金井廃寺
4 平遺跡
5 川上遺跡
6 上植木廃寺
7 間野谷遺跡
8 山際瓦窯跡
9 鹿ノ川窯跡
10 寺井廃寺
11 萩原瓦窯跡
12 黒熊中西遺跡
13 金山瓦窯跡
14 緑野寺
15 城戸野遺跡
16 精進場遺跡
17 皂樹原遺跡
18 五明廃寺
19 中堀遺跡
20 寺山廃寺
21 宮ヶ谷戸遺跡
22 石原山窯跡
23 大仏廃寺
24 馬騎の内廃寺
25 寄居廃寺
26 慈光平廃寺
27 西別府廃寺
28 旧盛徳寺
29 寺内廃寺
30 諦光寺
31 岡廃寺
32 金草瓦窯
33 荷鞍ヶ谷戸窯跡
34 十三宝塚遺跡
35 上西原遺跡
36 東伴場地遺跡
37 目白坂瓦窯

○は国分寺創建前の寺院と関連遺跡　●は国分寺創建期及び創建後の寺院と関連遺跡

第1図　関連遺跡位置図



第２図　縦置き型一本造りの製作工程模式図（高井2004より加筆転載）

８世紀後半の早い段階にはその造営が完了したものと思われる。

一方、国分寺造営後、国分寺以外の寺院活動は相対的に停滞気味であったようだ。既存の寺院では、発掘調査で出土する遺物、とりわけ瓦類は量的に少なく、しかも国分寺と同笵もしくは同系である場合が多い。また、国分寺と一線を画すような瓦当文様を持った寺院も殆ど新造されなかったようである。このような状況は、少なくとも７世紀後半から８世紀初頭にかけて各地で郡（評）衙や国府ができ、付属寺院や有力氏族の寺院が挙って造営され、律令による統治が推し進められた頃の状況とは明らかに異なっていた。

本稿では、武蔵国北部と上野国を中心に分布する上野国分寺系の無紋りの縦置き型一本造り軒丸瓦を通して、その寺院像について考えてみたい。

１　上野国の動向

上野国では７世紀後半に前橋市の山王廃寺、伊勢崎市上植木廃寺などの初期寺院が創建され、関東地方でもいち早く仏教の受容が始まった地域である。これらの寺院は、当時上野国で有力な豪族であった上毛野氏やその一族が造営したもので、覇権を競うがごとく古代交通路に近い地域に建立されている。各寺院の軒を飾った瓦は、畿内や朝鮮半島にある文様を祖型とし、その一部は武蔵や陸奥の寺院にも影響を与えた。

８世紀中葉になると上野国分寺が建立されるが、当初その瓦生産は秋間窯跡群と、笠懸窯跡群で行われていた。後に主な生産の場は、藤岡・吉井窯跡群へと移った。上野国分寺の創建軒丸瓦で注目されるのは、斬新なデザインの単弁５葉軒丸瓦である。この単弁５葉軒丸瓦は、当初笠懸窯跡群の鹿ノ川瓦窯で横置き型一本造りで生産される。横置き型一本造りは上野国に限らず各地の国分寺でも採用され、創建の時期を過ぎると姿を消してしまう「特殊な技法」である。その後、従来から上野国にある有紋りと、絞り目のない無紋りの縦置き型一本造りへと移行するが、無紋りに一本化される（註１）。無紋りの軒丸瓦は瓦当文様が多彩で、上野国内は勿論のこと、平安時代には武蔵北部までその分布が及んだ（第１図）。

A　上野国分寺の軒先瓦

上野国分寺では異なる二つの地域で瓦生産が行われたが、その生産の画期は概ね３期に分類されている（第３・４図）。Ⅰ期及びⅡ期は創建期、Ⅲ期は修造期である。軒先瓦は軒丸瓦、軒平瓦とも笵型が非常に多く、其々100種類を超える。

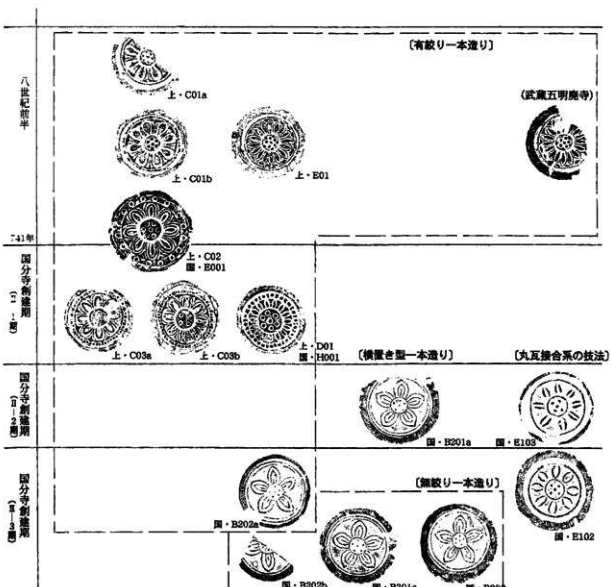
（１）Ⅰ期

創建Ⅰ期には、国分寺創建以前に建立された寺院の瓦も数多く含まれているが、主要な軒瓦は笠

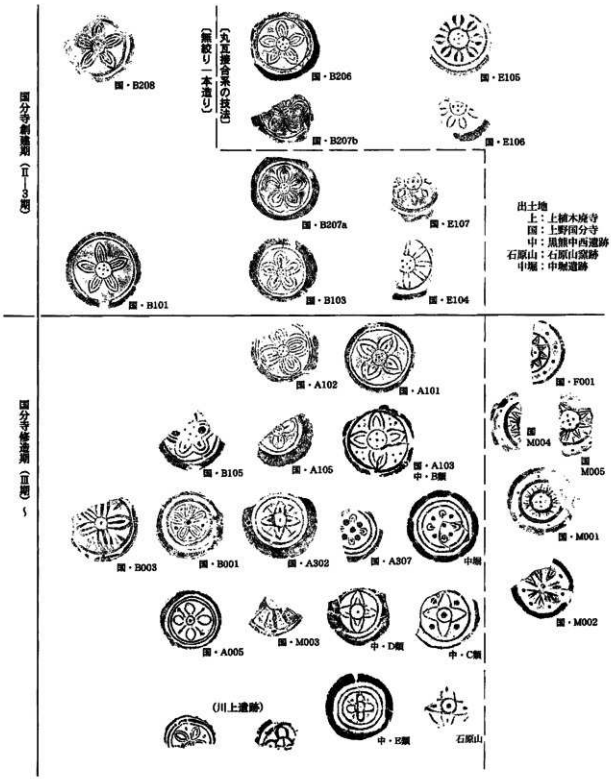
懸窯跡群（東毛）で単弁５葉蓮華紋軒丸瓦と偏行唐草紋軒平瓦、藤岡・吉井窯跡群（西毛）で単弁８葉蓮華紋軒丸瓦と重廓紋軒平瓦が生産されていた。また、製作技法は、東毛（笠懸窯跡群）では軒丸瓦が横置き型一本造りと、軒平瓦が一枚造りであるのに対して、西毛（藤岡・吉井窯跡群）では軒丸瓦が接合式、軒平瓦は桶巻造りである。国分寺の塔跡からはこの両者の瓦が出土することから、異なる瓦当文様が一つの建物に使用された可能性が高いと考えられている。

（２）Ⅱ期

創建Ⅱ期に東毛では、笠懸窯跡群の中で鹿ノ川窯跡から山際窯跡へと生産の場が集約され、軒丸瓦は瓦当文様こそ単弁５葉であるが、この時期に無紋り一本造り軒丸瓦の範種が考案され、軒平瓦も編行唐草紋が多種生産されるようになる。一方、西毛では、引き続きⅠ期に類似した単弁８葉の異範種が造られるが、藤岡の金山窯跡群などでは東毛で生産されてきた縦置き型一本造りの単弁５葉軒丸瓦も造られるようになる。また、軒平瓦の平



第３図　上野国における主な一本造り軒丸瓦の変遷（１）（高井2004を一部加筆）



第４図　上野国における主な一本造り軒丸瓦の変遷（２）（高井2004を一部加筆）

瓦は桶巻造りから一枚造りへと切り替えられている。Ⅱ期は生産地こそ二極化のままであるが、軒丸瓦、軒平瓦とも笵種が増え、複数の窯や工人による大量生産が図られている。さらに瓦当文様は軒丸瓦が単弁5葉に、軒平瓦は編行唐草紋に統一されていく傾向も窺え、急ピッチで国分寺の造営が進められていたことが裏付けられる。

（3）Ⅲ期

Ⅲ期は修造期である。基本的には国分寺が完成し、自然災害等で破損した差替え瓦・補修用瓦が主体である。年代的には8世紀末頃から10世紀代と幅が広く、共伴する遺物が少ないため、明確な編年観は示されていない。創建Ⅱ期との大きな相違点は、生産地ではこれまで国分寺の一極を担ってきた笠懸窯跡群の衰退化が進み、生産の主体が藤岡・吉井窯跡群へと移り、国分寺の生産拠点に大きな変革が生まれた段階である。軒先瓦では、単弁5葉軒丸瓦が種類、量とも減少し、替わって単弁4葉が主体となる。単弁4葉は笵種が多く、製作技法的にはすべて無絞りの縦置き型一本造りである。一方、西毛でこれまで生産されてきた単弁8葉軒丸瓦は退化した単弁8葉や6葉に替わり、幾何学的な文様の軒丸瓦なども出現するが、量的には少ない。軒平瓦も編行唐草紋が退化し、植物紋や鋸歯紋などが出現し、笵ではなく手描きの瓦当文様もみられる。

このようにⅢ期は相対的には量は少ないものの、種類が多いことが大きな特徴である。差し替えや補修にあたって、その都度幾つかの窯に瓦の発注を行っていたため、このような現象が生まれたものと推測される。

B　上野国分寺と関連性のある新造寺院

ここでは国分寺造営後に新しく出現した特徴的な寺院について記す。

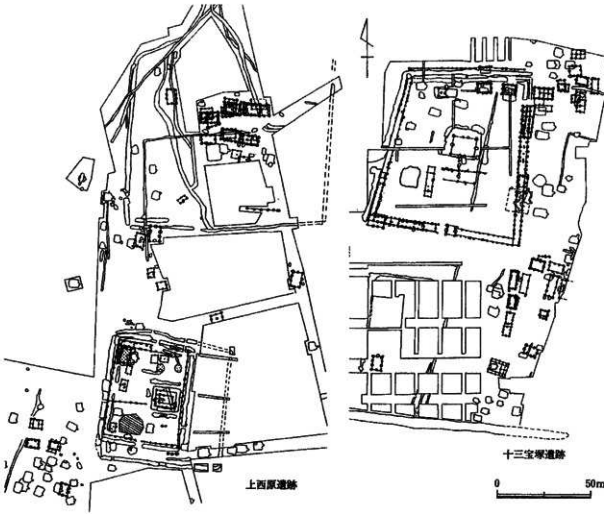
（1）上西原遺跡

上西原遺跡は前橋市下大屋町に所在し、上野国分寺の南東に位置する。幅約2ｍの溝で東西約40m、南北約70ｍの方形に区画された中に基壇建物と掘立柱建物跡が溝と柱穴列で囲まれて配置されている（第5図）。基壇や掘立柱建物跡周辺からは、瓦や瓦塔、塑像などが出土し、仏堂を持つ寺院とその北方に位置する関連施設であったことが判明した。方形の区画内には仏堂（金堂）と攪乱を受けているものの小規模な塔が存在した可能性も考えられる。出土した瓦は少なく、軒先瓦を基壇建物に葺いていない可能性が高いが、上野国分寺創建期と共通する瓦が出土する点は注目すべき点である。報告によれば「郡衙に仏教関係施設を伴っていた」とし、十三宝塚遺跡や綿貫遺跡の例をあげて「上野国における郡衙の形態の特色」としている。報告は郡衙的形態に拘りがあるように思えるが、国分寺造営以降の地方寺院にはこのような例が増えていると理解したい。

（2）十三宝塚遺跡

十三宝塚遺跡は伊勢崎市境町に所在し、上植木廃寺の南東に位置する。遺跡は発掘調査の中で、多数の掘立柱建物跡や緑釉陶器や墨書土器の発見から「官衙」遺跡として考えられていた。その後本格的な遺物整理が行われ、この遺跡が官衙遺跡ではなく台形区画の寺院跡と関連施設であることが判明した（第5図）。遺構の分布は東西150ｍ、南北320ｍの範囲で、掘立柱建物跡30棟以上、竪穴住居跡30軒以上、区画溝、そして遺跡の西側には二重の一本柱列で台形に区画された中に基壇建物2棟（他に2棟基壇建物の可能性あり）などが検出された。二重の一本柱列の規模は東辺92ｍ、南辺82ｍ、北辺60ｍ、西辺82ｍの台形状を呈し、当初は新旧の一本柱列とされていたが、後の検討の結果回廊の可能性が高いとされている。（以下、回廊）回廊には南面に南門が取りつき、南門は1号基壇建物と同一軸線上に設けられている。

1号基壇建物は回廊のほぼ中央部に位置し、桁行5間、梁行2間で、当初は掘立柱建物跡、最終



第５図　上西原遺跡・十三宝塚遺跡全体図（史跡十三宝塚遺跡1992から転載）

段階で礎石立建物へと変化したことが明らかになている。２号基壇建物は１号基壇建物の南東約15ｍに位置し、桁行３間、梁行３間で、二段の基壇築盛と掘り込み事業が確認された。遺物は、１号基壇建物の周辺からは瓦や釘類の他に塑像、瓦塔、三彩陶片が、２号基壇建物の周辺からは瓦類の他に金銅製の押出仏が出土している。遺構の規模や状況、遺物の出土状況などから１号基壇建物は金堂（仏堂・仏殿）、２号基壇建物は塔の跡であった可能性が高い。また、１号基壇建物の北側には遺構が分断されているが、３号基壇建物が北面回廊に並行して構築されている。報告には細かな記載はないが、講堂の可能性も捨てきれない。また、瓦類の多くは、回廊を含めたいわゆる伽藍地から出土し、掘立柱建物跡であれ、礎石立建物であれ、瓦葺建物であったことは明らかである。しかし、軒先瓦は極めて少なく、報告では「特殊な葺き方も検討する必要がある」とあるように平瓦が多く、総平瓦葺きや甍棟などが想定される。

軒丸瓦は６点と少なく、上野国分寺・尼寺の単弁５葉の退化したタイプで、８世紀後半でも中頃の年代で、竪穴住居跡出土の最も古い土器の年代ともほぼ合致することから、この軒丸瓦をこの寺院の創建瓦として採用されたものと考えられる。また、集落は基壇建物の年代に近いものが少ないことから、寺院が造営された後に整備されていったものと考えられている。

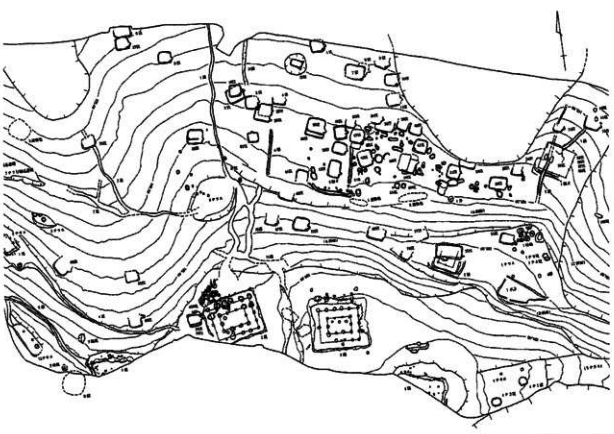
一方、回廊の外側に展開する掘立柱建物跡や竪

穴住居跡は、幾つかの群を形成しているような配置が想定できる。回廊の中にも竪穴住居跡はみられるが、状況的には同時存在は考え難い。回廊の外側では、明らかに回廊の位置を意識して掘立柱建物跡の主軸や竪穴住居跡や井戸跡が配置されている。それぞれがどのような役割を担っていたのか興味深い。伽藍地を含めた竪穴住居跡や井戸跡からは、寺院や建物に関する墨書土器が数多く出土しているが、とりわけ井戸に纏わる「大井」の墨書が数多く出土しているのは注目される。

(3) 黒熊中西遺跡

黒熊中西遺跡は、群馬県高崎市吉井に所在する。遺跡は鏑川右岸の河岸段丘上の丘陵部に立地し、三つの尾根を利用して造営された寺院跡と丘陵下部の平場に造られた集落跡から成っている（第6図）。寺院周辺には、須恵器の窯跡群や鏑川の河岸段丘上に営まれた矢田遺跡をはじめとする集落遺跡があり、その関連性も指摘されている。

礎石建物は四面に廂を持ち、平面形態の分かる2棟は瓦葺き建物と推定される。瓦は平瓦こそ多いが、軒先瓦や軒丸瓦は少ない。また、瓦は礎石建物で使われなくなった後も集落のカマドで転用されたとみられ、集落からの出土比率も高い。礎石建物の周囲には特別な区画はなく、尾根の頂部に存在することが集落と寺院を区画するものであったと考えられる。また、寺院でありながら仏教法具や関連遺物は極めて少なく、集落からの出土遺物も日常雑器が主体である。僅かに竪穴住居跡の一部から未使用に近い羽釜など土器類が一括廃棄されるなどの祭祀的な事例がみられる程度である。報告では周辺に濃い密度で仏教関連遺跡や集落が分布することから、これらが一体となって維



第6図　黒熊中西遺跡全体図（黒熊中西遺跡から転載）

持・管理・経営にあたっていたものと推測している。

出土した軒丸瓦は、無絞りの縦置き型一本造りである。6種類の単弁4葉軒丸瓦が確認されており、C類、D類は国分寺と同笵、中堀遺跡とは同文である。6種類の軒丸瓦に年代的に大きな隔たりはないものと考えられることから、同じ建物に瓦当文様の異なる軒丸瓦が葺かれていた可能性も十分考えられる。報告では、創建年代を10世紀の前半頃から中頃と考えている。

3　武蔵北部地域の動向

武蔵北部（荒川以北）地域では、7世紀末頃から8世紀初頭にかけて官衙（評）の整備に伴って付属寺院と考えられる寺院の造営が相次いだ。西別府廃寺、岡廃寺、皂樹原遺跡（廃寺）、城戸野廃寺、東伴場地遺跡（廃寺）、馬騎の内廃寺、五明廃寺などである。五明廃寺を除く寺院は、共通の文様を持った同笵の軒丸瓦が採用され（東伴場地遺跡は異笵）、馬騎の内廃寺を除く寺院では創建瓦となった。この地域は、7世紀中頃から始まった初期寺院造営の動きにはやや遅れたが、一つの同笵瓦の導入を介して武蔵北部の官衙施設の景観は一変した。

一方、五明廃寺の創建瓦は上植木廃寺との関連性の強さを想起させる。瓦の生産地こそ不明だが、同笵の縦置き型一本作り（有絞り）の単弁軒丸瓦や軒平瓦、同じ叩き具を使用した丸瓦・平瓦の存在は、上毛野氏系の氏族が建立した寺院の可能性が高いことを窺わせるものである。

これらの寺院の多くは、国分寺創建を境にその活動に陰りがみえ、急速に廃寺化が進んだことが想定される。城戸野遺跡（廃寺）、岡廃寺、皂樹原遺跡（廃寺）、馬騎の内廃寺、東伴場地遺跡、五明廃寺では、8世紀後半以降の瓦が殆どみられなくなってしまう。また、土器などの生活に関わる遺物も皂樹原遺跡（廃寺）を除いては殆ど出土していない。その他の寺院も出土する瓦の量も少なくなっていることは明瞭である。

一方、武蔵国分寺の造営は難を極めたと思われ、天平19年（747）の郡司層への督促や、上野国分寺を上回る多種多様な創建期の軒先瓦が多いことがその慌ただしさを物語っている。恐らく郡司層は国分寺の造営に駆りだされたことで、多大な財力等を失したであろうし、そこにその後自らの寺院を管理する力がどの程度残されていたかは疑問である。これも国分寺造営後の寺院活動の衰退と無関係ではないであろう。

埼玉県内では、武蔵国分寺創建期に造営された寺院は殆どなかったものと考えられる（註2）。熊谷市寺内廃寺は8世紀後半に造営された寺院で、勝呂廃寺と共に数少ない武蔵国分寺系の軒先瓦が出土する遺跡である。寄居廃寺の軒先瓦は確認されていないが、出土遺物などから平安時代に造営された寺院である可能性が高い。一方、上野国分寺系の無絞り一本造りの軒丸瓦が出土する遺跡では、旧盛徳寺や美里町宮ヶ谷戸遺跡が知られていたが、本庄市中堀遺跡の寺院関連遺構から無絞り一本造りの軒丸瓦が出土し、これらの瓦が荒川北岸の比較的広い範囲に分布することが明らかになってきた。

以下、武蔵北部の国分寺創建後の主要寺院について概要を記す。

（1）旧盛徳寺

旧盛徳寺は、行田市大字埼玉に所在し、埼玉古墳群の南約500mに位置している。昭和35・36年に発掘調査が行われ、現在の本堂西側付近を中心に大量の瓦が出土し、礎石も検出された。しかし、建物等の特定までには至らなかった。瓦の散布状況から寺院地は、東西170m、南北150mと推定されている。寺伝によれば大同年間（806～810）の創建とされるが、詳細は不明である。周辺では、愛宕通遺跡で壺Gを伴う住居跡から、本寺院跡と

同系の瓦も出土している。

出土した瓦は単弁4葉蓮華紋軒丸瓦が2種類、弁数は不明であるが、他に1種類存在する（第9図）。軒平瓦は格子紋、唐草紋が主体で、重廓紋も1点出土している。平瓦は一枚造りである。単弁4葉軒丸瓦は、縦置き型の一本造りで、瓦当裏面は無紋りである。瓦当が全体に薄く、瓦当面は縄叩きされ、中房を持たず、4個の連子が弁に対応する。出土した土器類との共伴関係が明らかではないが、9世紀後半頃の年代が考えられている。しかし、重廓紋軒平瓦が出土していることや近くの前玉神社（式内社）に所蔵されている平瓦は桶巻造りであることなどから、その創建は少なくとも8世紀前半まで遡る可能性もある（註3）。

（2）宮ヶ谷戸遺跡

宮ヶ谷戸遺跡は児玉郡美里町大字児玉に所在し、身馴川の自然堤防上の集落遺跡である。瓦は平安時代の竪穴住居跡のカマド補強材として利用され、軒丸瓦は6種類出土した。瓦が出土した住居跡は、共伴した土器などから、9世紀後半と考えられる。軒丸瓦のうち1種類は単弁5葉であるが、他はすべて単弁4葉である（第9図）。いずれも瓦当裏面には無紋りの布目が残る縦置き型一本作りであるが、4は布目を横ナデして消している。また、1と2は単弁4葉であるが、ネガとポジの関係が明瞭で、旧盛徳寺と同様笵の当たりが浅く、文様はやや不鮮明である。笵種の多さと同様、瓦当の大きさや厚さも様々である。面形が小さい3は13㎝、大きな4は推定で約18㎝もある。これらの瓦は何処の寺院の屋根を飾っていたのであろうか。

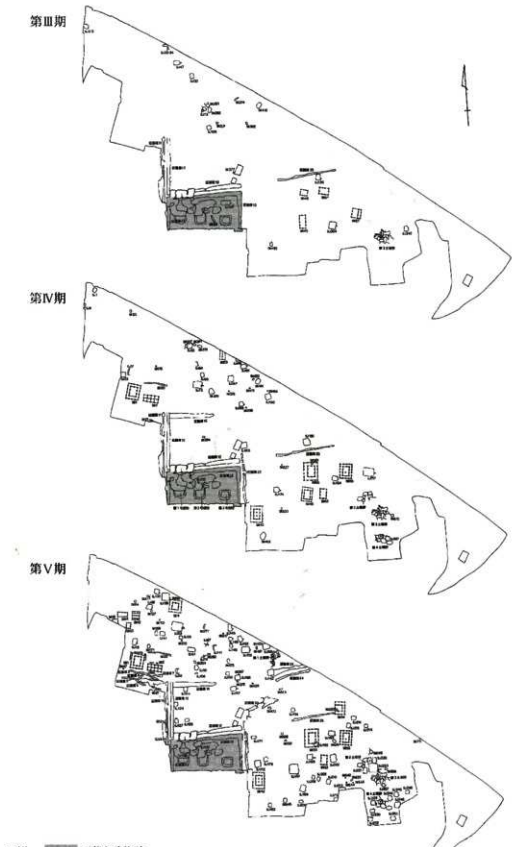
（3）中堀遺跡

中堀遺跡は本庄市に所在し、8世紀末から10世紀末までの約200年間続いた行政機能を備えた集落遺跡である。中堀遺跡からは平安時代の竪穴住居跡258軒の他、道路跡、鉄生産及び消費に関する施設、溝で囲まれた寺院と考えられる瓦葺き建物跡、大甕や土器の埋設遺構、複数の掘立柱建物跡等を溝や柵で区画する施設など、多くの遺構が検出された。また、在地産の須恵器・土師器類の他に、国府級の官衙では稀な舶載の陶磁器、緑釉陶器、灰釉陶器などが多数出土した。さらに網のおもりに使用した土錘が大量に出土している。報告では中堀遺跡の性格について、「天長6・7年（829・830）武蔵国に設置された勅旨田管理施設（庄または佃）」と仮定している。言い換えれば、勅旨田を管理するが故に夥しい量の遺物の流通を可能にし、土器類の管理施設や都鄙りの仕組みを導入できたものと考えられる。

寺院と考えられる施設は、幅約2ｍの溝で囲まれた中に3棟の建物跡と対になる3基の地鎮遺構と考えられる土壙が検出された。溝で囲まれた部分は南側に伸びていたと考えられるが、既に攪乱を受けていて、南側にどのような建物が存在したかは分からない。しかし、北側に東西1列に並立して検出された建物跡はいずれも同規模であることから、仏堂的建物の可能性は低いのではないかと考えられる。事実周辺からは仏教的な遺物の出土量は少なく、仏像や瓦塔なども出土していない。仏堂が存在するなら、攪乱によって壊されてしまった南側であろう。

さて、3棟の建物跡はⅠ期～Ⅶ期に分類された中堀遺跡の変遷の中で、最も盛期といえるⅢ期～Ⅴ期（9世紀後半～9世紀末）に該当する（第7図）。遺跡はこの3棟の建物が造られたⅢ期から徐々に拡大を始め、掘立柱建物跡などの複合施設が揃ったⅤ期にピークを迎え、その最中火災を受けて全焼し、以後それらは再建されることなく、集落も次第に衰退していった。

出土した瓦類は小破片が多いが、軒丸瓦、軒平瓦など5種類が出土している。軒丸瓦は3種類あり、隣接地の地蔵堂跡からも別笵の単弁4葉が1種類確認されている。3種類はいずれも単弁4葉で、瓦当裏面は無紋りの縦置き型一本造りである（第9図）。



第７図　中堀遺跡　第Ⅲ～Ⅴ期遺構分布図

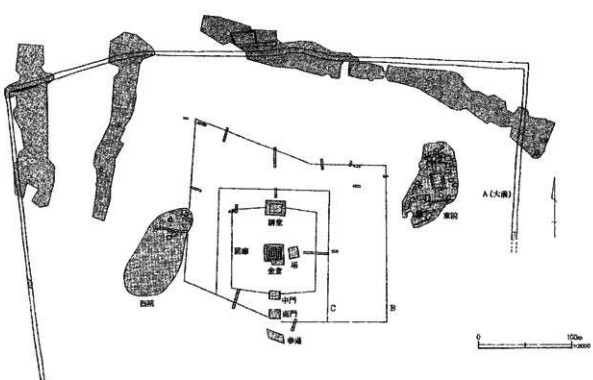
（4）寄居廃寺

寄居廃寺は、寄居町六供の寄居小学校敷地内に所在する。過去に小学校建設の際に多量の瓦や鏡、仏像、銅印などが出土し、礎石も確認されたという。校庭隅には「鐘楼跡」と呼ばれる畑もあり、本格的な寺院であったと考えられている。その後、体育館建設の際に発掘調査が行われ、方形に歪んだ瓦溜り３か所、瓦と焼土を多量に含む包含層が検出され、後世の溝跡に壊されていた。方形に歪んだ瓦溜りは何らかの建物の可能性が考えられるが、詳細は不明である。出土した瓦は丸瓦と平瓦だけで、軒先瓦は出土していない。平瓦は細かな格子叩きで、すべて一枚造りである。また、瓦は割れているものの形状の分かるものが比較的多く、何らかの事由によって創られたものではないことは明らかである。恐らくは瓦や焼土を含む包含層から、寺院そのものが何らかの原因によって火災に遭ったものと推測される。寺院が消失した年代は、焼土層から瓦と共に出土した須恵器坏と高台付椀から、９世紀後半と考えられる。

（5）寺内廃寺

寺内廃寺は熊谷市江南町大字柴に所在し、荒川右岸の江南台地上に立地する。寺内廃寺の所在する地は、古代では男衾郡に属し、付近には百済木遺跡や諦光寺廃寺など古代寺院関連遺跡が数多く存在する。

寺内廃寺は、古くから土壇状の高まりが複数知られ、金堂等の基壇ではないかと考えられてきた。発掘調査では、金堂、講堂、中門、南門、東院集落、参道、区画溝等が調査され、出土遺物から８世紀後半頃に創建された広大な寺院地を保有する本格的な寺院であることが明らかになった（第８図）。出土遺物には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、墨書土器、八花鏡、塑像、紡錘車などがある。中でも墨書土器には、「花寺」、「石井寺」、「東院」、「上院」、「大家」、「千油」などがあり、この寺院が「花寺」や「石井寺」などと呼称され、「東院」等から各建物に役割が与えられていたことが分か



第８図　寺内廃寺全体図

った。また、文字瓦にも「市田郷瓦大里」、大里郡□」、「豊」などがあり、隣接する大里郡との関わりを示す資料が出土している。

出土した瓦類は、すべての種類において量が少ない。軒丸瓦は素弁8葉軒丸瓦と単弁4葉軒丸瓦の二種類が金堂跡から出土した。軒平瓦は扁行唐草紋と連弧紋の二種類が出土し、上記軒丸瓦と組み合うと考えられる。素弁8葉軒丸瓦は平城宮系軒丸瓦の系譜を引くもので、推定直径は約20cmと大型である。単弁4葉軒丸瓦は推定直径約15cmで、一見上野国分寺にある瓦当文様のように思えるが、弁間に珠文はなく、瓦当裏面に布目痕跡もない。軒平瓦は平安時代前期に一般的にみられるもので、武蔵国分寺との関わりを十分考慮できるものであろう。

さて、寺内廃寺は立派な基壇建物等を備えた本格的な寺院にもかかわらず、瓦の量が極めて少ない。嘗て、筆者は「堂塔が焼失した時点での瓦の出土量を現状と考えれば、甍棟などの部分的な葺き方も考えられる」としたが、「市田郷瓦大里」や「大里郡□」の文字瓦の存在は、隣接する郡から一定量の瓦が供給されていたことを窺わせるものである（註4）。とすれば屋根には必要にして十分な瓦が葺かれていた可能性がある。問題は軒先瓦の少なさである。元々、軒先だけに葺かれるため量は少ないが、寺院の規模や建物を考慮すればもう少し出土してもいい筈である。

4　瓦の生産体制と瓦葺き寺院の衰退

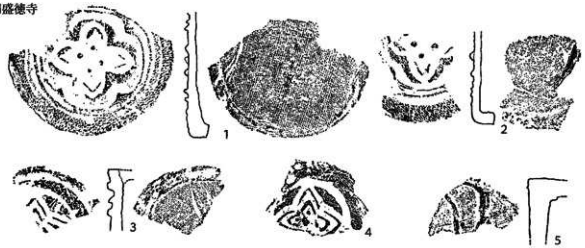
上野国と武蔵国の瓦生産体制は、大枠では類似し、基本的には須恵器生産を母体とした窯跡群の中に構築されている。武蔵国では瓦窯単体は少ないが、上野国の場合、国分寺創建以前は独立した瓦窯から瓦の供給を行っていた。しかし、上野国では国分寺の瓦生産の主体が藤岡・吉井窯跡群に移ると、その生産窯は金山窯跡周辺で行われていたと考えられている。藤岡・吉井窯跡群で生産された無紋り一本造り軒丸瓦は笵種が多く、類似した製品も数多く造られている。つまり、生産窯は特定できないが、金山窯跡以外でも同笵や同文の製品が数多く生産されていることを裏付けている。上野国内では、国分寺創建以降、無紋り一本造り軒丸瓦が国分寺の他、山王廃寺や上植木廃寺といった7世紀後半に建立された寺院にまで供給されており、切れ目なく瓦生産の基盤が維持されてきたことが解ってきている。言い換えれば、国分寺が造営された以降は国分寺の運営を維持するために「国分寺系」瓦一色となり、既存寺院の差替え瓦も一体となって行ってきたことが上野国内の瓦生産体制であったと言える。

一方、武蔵国では、平安時代になって東金子窯跡群の八坂前窯跡や新久窯跡で武蔵国分寺塔再建に関連して瓦生産を行うが、荒川以北で現在明らかになっているのは、深谷市石原山窯跡だけである。石原山窯跡からは、無紋りの一本造り軒丸瓦が4種類と丸瓦及び平瓦が出土している。このうち単弁4葉軒丸瓦（第9図2）は黒熊中西遺跡C・D類に類似する。また、中堀遺跡の単弁4葉軒丸瓦（第9図1）とも類似し、同笵の可能性もある。さらに中堀遺跡の同じ単弁4葉軒丸瓦は旧盛徳寺の単弁4葉軒丸瓦と類似し、上植木廃寺例とは、同笵であることが確認されている。

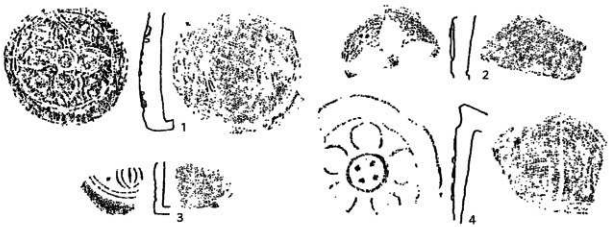
これらのことからわかることは、石原山窯跡の運営者が上野国内の有力氏族と強い繋がりを持ち、藤岡・吉井窯跡群の瓦工人の協力を得て、武蔵北部の寺院を中心に供給したものではないかと考えられる。しかし、同時期と考えられる瓦の種類が多いのはなぜであろうか。上野国分寺創建直後の上西原遺跡や十三宝塚遺跡では、瓦も少ないが、種類も少ない。国分寺修造期にあたる平安時代になると、量的には少ないが、種類は寧ろ増えている。

では、なぜ国分寺創建以降の寺院では瓦が少ないのだろうか。軒先瓦に限っては、本当に葺いた

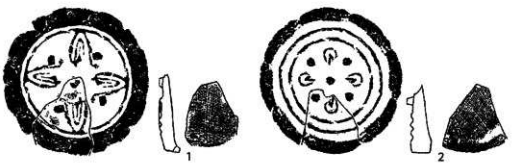
旧盛徳寺



宮ヶ谷戸遺跡



中堀遺跡



石原山窯跡

第9図　埼玉県内出土の無絞り一本造り軒丸瓦

のだろうかと疑うほどの量しか出土していない。上西原遺跡や十三宝塚遺跡では、国分寺や尼寺の軒先瓦を採用しているにも関わらず、数量的に少なく、瓦を葺かない建物も存在したようだ。しかし、二つの遺跡に寺院があることは紛れもない事実である。瓦を葺くという行為は国分寺創建後の寺院ではどこまで必要であったのか。これらの遺跡では、寺院としての行為等が優先したような形跡もある。十三宝塚遺跡や上西原遺跡、寺内廃寺でも寺院に関するおびただしい墨書土器が出土している。墨書土器の持つ意味は様々であるが、施設や人名などその帰属に関するものが多いのは、8世紀後半以降の寺院関連遺跡では多くみられる現象である。つまり、寺院としての行為が優先され、瓦当文様に象徴される氏族や官の繋がりを示す瓦への意識は薄れていたものと推測されるのである。そうした過程の中で瓦葺き寺院は次第に衰退していったものと考えられる。

むすびにかえて

上野国や武蔵北部における国分寺創建後の寺院像は、それ以前とは趣を異にしていた。特に瓦屋根の景観は、国分寺系瓦一色となり、その中で同笵や同文の瓦が多数生産された。これらの同笵や同文瓦は、一つの窯跡で生産されたものではなく、小規模な窯で分散して生産されたため、種類も多くなったと考えられる。また、軒先瓦の出土比率が低いことも国分寺創建後の大きな特徴である。恐らくは寺院活動の変化に加え、瓦の葺き方にも変革が生じ、瓦葺き寺院が衰退していく要因の一つとなったのではないかと考えられる。

更に今回取り上げた無紋りの縦置き型一本造り軒丸瓦は、小規模寺院でも多くの笵種が存在し、一つの建物を笵種の異なる軒丸瓦で葺くことが一般的に行われていたことを窺わせ、平安時代における地方寺院の一形態を写し出している事象といえる。

本稿では瓦葺き寺院の衰退を、主に出土瓦の量的問題や生産体系の変化の中から見てきたが、力量不足から抽象的な捉え方になってしまった感がある。別の視点から再考したいと考えている。

本稿を作成するにあたり、下記の方々からご教示をいただきました。記して感謝の意を表します。
神谷佳明　高井佳弘　田所　真

註

1　横置き型一本造りと縦置き型一本造りについては、高井論文（2004）に詳細があり、参照されたい。

2　天平宝治2年（758）、新座郡が設置された。現在の新座市、志木市、和光市周辺の地域が該当すると考えられている。現在のところ、郡衙や寺院跡の場所は特定されていない。

3　旧盛徳寺周辺では、前玉神社所蔵の瓦の他に、大型の礎石が出土していたとの伝承がある。事実であれば旧盛徳寺は、現在の地に移建された可能性も考えられる。

4　熊谷市市田揚井の目白坂瓦窯跡で、古墳調査の際に偶然発見された。窯跡は2基想定されていて、灰原から軒丸瓦が1点と、丸瓦及び平瓦が多数出土した。丸瓦は凸面を磨り消す勝呂廃寺系列の手法で造られている。平瓦は桶巻作りである。軒丸瓦は小破片であるが、単弁8葉と考えられている。付近には大谷瓦窯跡や勝呂廃寺系の平行叩き平瓦が出土する遺跡があり、関連性が注目される。寺内廃寺出土瓦よりは古い窯跡といえる。

引用参考文献

池田敏弘　1989「武蔵国における平安仏教受容の一様相　一道忠系天台教団成立の社会背景（予察）一」『土曜考古』第14号　土曜考古学研究会

出浦　崇　2009「上野国佐位郡における官衙と寺院一定額寺との関連から一」『国士舘考古学』第５号　国士舘大学考古会

上原真人　1997『瓦を読む』歴史発掘11　講談社

大江正行　1999『史跡十三宝塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

関東古瓦研究会編　1997『関東の初期寺院・資料編』

関東古瓦研究会編　1997『聖武天皇と国分寺』雄山閣

埼玉県県史編さん室編　1982『埼玉県古代寺院跡調査報告書』

須田　茂　1992『黒熊中西遺跡（１）』群馬県埋蔵文化財調査事業団

須田　勉　1995「国分寺造営勅の評価　一諸国国分寺の造営実態から一」『古代探叢Ⅳ』　早稲田大学出版部

高井佳弘他　1988『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書・本文編』群馬県教育委員会

高井佳弘　1999「上野国分寺出土の郡郷名押印瓦について」『古代』107号　早稲田大学考古学会

高井佳弘　2004「上野国における一本造り軒丸瓦の導入と展開」『研究紀要22一創立25周年記念論文集』群馬県埋蔵文化財調査事業団

田中広明・末木啓介　1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集

昼間孝志他　1988「北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅱ」『研究紀要』第４号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

昼間孝志　2001「武蔵寺内廃寺の空間構成」『古代』110号　早稲田大学考古学会

昼間孝志　2003「地方寺院における単弁軒丸瓦の成立」『研究紀要』第18号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

松田　猛他　1999『上西原遺跡』群馬県教育委員会

山口逸弘　1994『黒熊中西遺跡（２）』群馬県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要 第28号

2014

平成26年3月17日　印　刷

平成26年3月20日　発　行

発　行　公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369－0108　熊谷市船木台4丁目4番地1

http://www.saimaibun.or.jp

電　話　0493－39－3955

印　刷　巧和工芸印刷株式会社